追悼　小井口有さん

2019.8.15

小田　富英

今年の１月 12 日、鎌倉で行われた常民大学拡大運営委員会は、今後の方向性を決定する大事な会であった。その何日か前、小井口さんから電話があった。「うちのと一緒に参加したいのだけど、いいかな。」との内容。電話の向こうの小井口さんに口では、「お墓参りもあるから、いいんじゃない。」と明るく答えながら、心の中では「観光旅行のつもりでこないでよ。」とつぶやいていた。別の件で、この会をめぐってのトラブルがあり、鬱屈していた時であったから、なおさらだった。

ごめんなさい。小井口さん。このことの深い訳がわかったのは、当日の会。小井口さんの「今、大腸ガンの治療中。闘っているというよりも、共に生きていこうとガンに言い聞かせている。もし、自分に何かあったら今後のことは、こちら（奥さんの淑子さんの方を向いて）に。」という笑いながらの小井口さんの発言であった。

すでにこの会の報告が出ているが、この会の今後、常民大学、とりわけ合同研究会の存続はどうするのか、共同の学びの場とその交流をどうするのかを個々に問うという大切な会で、遠州の大石さん、鎌倉の中野さん、立川の池谷さんらの「たたき台」をもとに、ひとりひとりが、人任せではなく、自分にできること、できないことを本音で語り合う場であったから、なおさら心に響いた。小井口さんの発言のあとからは、自分がやらなくてはいけないことの話が続き、「一人になっても」が合言葉のように響き合った。これが、結論ではないけれど、小井口さんの発言によって、自分に引き付けて考えようとした気運で一体感が生まれたように私は感じた。

その後の懇親会でも、小井口さんは明るかった。「ガンに俺が死んだら君も死ぬんだよ」と言いきかせていること、奥さんからは「看護師さんがかわいくて、その人に会いに行くのが楽しみと言っているんですよ」など、小井口さんらしい話で笑いをとっていた。

そういえばと思い出すことがある。去年の 1 月のお墓参りと運営員会（この時の話し合いは、「続けてもらいたい」といった発言が多い）の時のことだ。小井口さんが小脇に抱えていた本が、吉田松陰の遺言書『留魂録』であったのだ。「小田さん、まだこの本読んでないの」とでも言いたげな含み笑いが、何を言いたかったのか、今やっとわかった気がする。

各常民大学からの弔電も届いていました。
沢山の生花のなか、斎場の入口に、似内さん、健さん、
糠森さんの名前で、「遠野常民大学」の大きな御供が
あり、目を引きました。「誇りと自信」そのものでした。

小井口さん、お疲れさまでした。そして、ありがとうございました。

小井口さん。一時でも、「観光旅行じゃねぇよ」などと思ってしまってごめんなさい。去年の『留魂録』を巡る会話で、もう少しつっこんでいればよかったと悔やんでいます。それにしても、小井口さん、これから常民大学の内からの総括に取り組まなければならない私たちにとって、貴方がいないことがどれほどの負荷となるのか、それは考えたくなくなるくらい大きなことです。

小井口さんと初めて会ったのは、磐田で開かれた第５回常民大学合同研究会の時であったと思います。似内さんとふたりで、このすぐあとに、遠野常民大学を開講することを報告されましたね。私もあの会で、「柳田国男研究 15 年と私」を報告し、みなさんに『毎日小学生新聞』に連載した「柳田国男おじいさんのメッセージ」を読んでもらいました。似内さんと二人で、食い入るように読んでくれていたのを、今でも鮮明に覚えています。あの時から、小井口さんは私よりずっと年上の（実際はひとつしか違わないのに）、しっかりとした兄貴のような存在になっていたのです。

合同研究会や、代表者会議での小井口さんの発言は、いつも私たちに元気をくれるものでした。それは、後藤先生と、似内、小井口の強力なタッグからの前向きな提案があったからです。ひとつは、遠野に女子大学を創り、語り部の資格をもった保育士や幼稚園の先生を養成し、全国に送り出すこと。遠野物語ゼミナールを毎年開講し、学びのシステムをつくること。そして、遠野の内からの『遠野物語』注釈を進め、遠野市民に「誇りと自信」(これは小井口さんの口癖でしたね)を植え付けること。などなどです。女子大学設立は保留となったものの、小井口構想は着実に実を結んでいきましたね。眼に見えないところでも、小井口さんの「遠野市民に誇りと自信を」は、確実に浸透していきました。

今、私の手元に小井口さんが企画した 1993 年８月に開かれた「第８回国民文化祭いわて 93　「柳田国男」と 21 世紀　―縄文発信・未来発見―　講演とシンポジウム」のチラシがあります。小井口さんが開会の挨拶とパネラーを務め、鶴見和子の講演「内発的発展論の原点としての『遠野物語』」を柱にいただいたこの会は、ある意味、後藤先生、似内、小井

口の三人タッグの絶頂期であったのでしょう。ここでの主張には、具体性と展望がありました。

第 13 回　常民大学合同研究会（立川）
まさに絶頂期の 1995 年、小井口さん、後藤先生の笑顔がまぶしい。隣も今は亡き鶴見俊輔氏。

ただ残念なのは、ある時から小井口さんの口から、こちらが了解できない飛躍した言葉がでるようになったことでした。

小井口さん、こちらが理解不能の未熟な頭であったのかもしれませんが、もう少しわかりやすく遠野常民大学や、遠野物語研究所の総括を聞きたかったです。

例えば、あの評価が高かった『注釈　遠野物語』（後藤総一郎監修、遠野常民大学編著、筑摩書房、1997 年 8 月）が、なぜ一時の爆発で終わったのか。その収支は？。『遠野物語』発刊 80 周年、90 周年の行事担当者としての反省と 100 周年の市民企画委員会委員長になった思いはいかばかりであったのか。とくに 90 周年の大江健三郎講演問題は何が原因であったのか。常民大学と遠野物語研究所の移行は問題なく続いたのか。遠野特有の人間関係の不透明さにメスを入れることはできなかったのか。さらに、遠野文化研究センター友の会会長として何をやりたかったのか。何ができなかったのか。そして、常民大学の検証として上梓された、『地域に根ざす　民衆文化の創造　常民大学の総合的研究』（北田耕也監修、地域文化研究会編著、藤原書店、2016 年 11 月）での聞き書き調査で語らなかったことは何だったのか、などなど・・・・。

今となっては、ただただ悔いるばかりです。

小井口さん、武蔵野市の子供たちを連れて、民宿りんどうに泊まり、善明寺で肝試しをやったあと、ジュースをごちそうしようと立ち寄ったイタリアンレストランで、小井口さんたち青年会議所の飲み会に出くわし、お互いの口から、「どうしてこんな所にいるの」が出た時はお笑いでしたね。その時、あるお父さんを迎えに来た土淵中学校の一年の男の子が、武蔵野の小学生の前で、昔話を語ってくれたことは、今でも語り草です。「語り部教室」「こども語り部」が根付いていること、あの時の小井口さんの笑い顔は、それら全てが満点を意味していました。

さらに、遠野物語ファンタジーツアーとして、武蔵野市の若い先生たちを連れて行った時でも、仕事が忙しいと言いながら、マイクロバスを自ら運転し、遠野、花巻を案内してくれました。あの時に話した、教員の人事交流は実現しなかったけれど、市役所の職員の

交流は定着しているようです。小井口さんの夢が、今に引き継がれていること、確かです。

この６月、遠野で行われた第 38 回　全国地名研究者大会では、それを見事に証明しました。小井口さんの所にも、遠野常民大学や『注釈　遠野物語』のことを聞き書きにいった to no プロジェクトの富川君、多田君、及川さんたちの発表は、参加者から大きな拍手をもらいました。彼らは、小井口さんたちの常民大学設立期と同じ熱い想いを抱きながら、若さという特権でさまざまな切り口での取り組みを始めています。

小井口さんが、これからの遠野物語研究は若者向けに「ビジュアル重視」（遠野常民大学 HP 記事より）でいく必要があると語ったことに呼応しているかのようです。

間違いなく、小井口さんが蒔いた種は遠野という土壌に根付いています。ゆっくり休んで、そちらでも後藤先生たちと常民大学を広めていてください。　　合掌

冒頭、小井口さんに謝らなければならないことから始めたが、最後に小井口さんに褒めてもらいたいことを紹介して追悼文としたい。

１月の会で、大腸ガンであることを告白したあと、このことはここにいる運営委員の人たちだけの胸にしまっておいてほしい、とくに遠野の人たちには言わないでほしいと小井口さんは言い、「もし、遠野で知った人がいたら小田さんがしゃべったことにするからね」と言われた。遠野大会の前、何人かに小井口さんに声かけたかとか、小井口さん呼んでないのと言われたが、がまんして口を濁した。５月の小井口さんの自宅で行われている勉強会に参加した人からも、病気だとは知らなかった、いつも最後にコメントするけれど、いもより短く、声も小さかったと言われた。回りの人に心配かけたくない、気遣いさせたくないとの小井口さんの覚悟が、ここまで徹底していると正直驚いたが、逆に、しゃべらなかった私を、小井口さんは褒めてくれるだろうかと思った。そのことを、奥さんの淑子さんに話すと、おかげで家族に見守られながら自宅で、静かに最後の十日間を過ごせましたとおっしゃっていただいた。よかったのだ。小井口さん、褒めてくれるかな。　　感謝